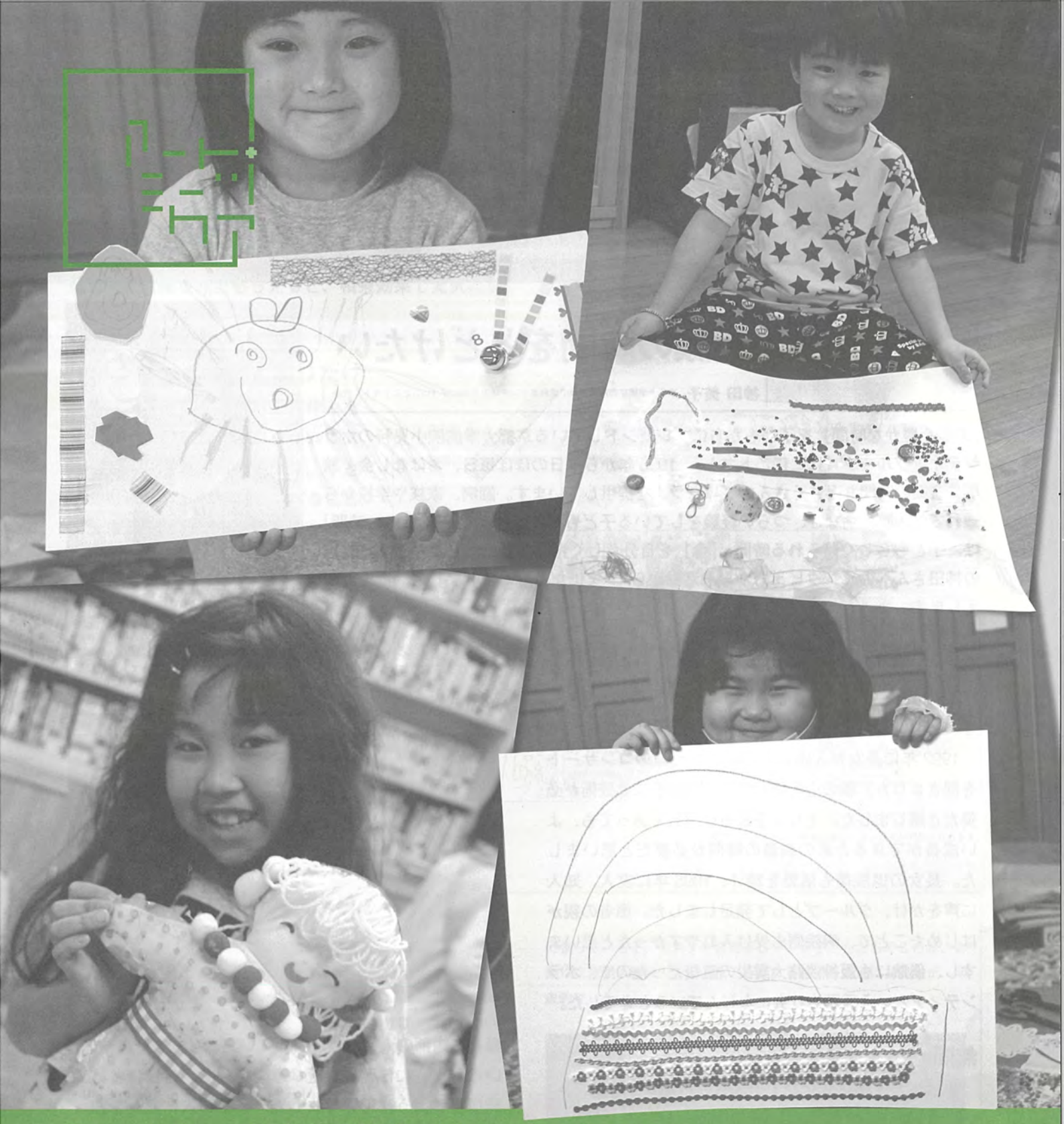


アートミーツケア学会 News+Letter

Vol.10 2012 Autumn

CONTENTS

特集 いのちを育む場 —— 療養環境とアートを考える
神田美子、阿部こずえ、森合音、大久保明子

臨床こばなし 三宅博子、中島香織
研究会レポート 森口ゆたか、長津結一郎
インフォメーション 2012年度総会・大会のご案内 入会のご案内

Photo:「にこにこトマト」の活動から

特集

いのちをはぐくむ場
——療養環境とアートを考える

病院で行われる文化的な活動やアートの取り組みの多くは、決してマニュアルではとらえきれない、個人としての思いからスタートしています。ケアの現場にある切実なニーズに日々向き合いながら、目の前にいる人の幸福を願って行われている活動のなかに、私たちが豊かにいきていくためのヒントがあるのではないでしょうか。
今号では、「にこにこトマト」と「NPO法人アーツプロジェクト」の取り組みから、療養環境でのアート活動について考えます。

子どもたちに笑顔の時間をとどけたい

神田 美子 京都大学医学部附属病院小児科ボランティアグループ「にこにこトマト」代表

「楽しく豊かな時間」を子どもたちにプレゼントしている京都大学病院小児科のボランティアグループ「にこにこトマト」。1995年から平日のほぼ毎日、おはなし会、絵画や音楽の時間などたくさんのプログラムを提供しています。闘病、家族や学校から離れての入院生活など、つらい経験をしている子どもたちにとって、「にこトマ時間」は、子どもらしくいられる時間、「今」を自分らしく生活する時間となります。代表の神田さんへのインタビューから、活動から17年になる「にこトマ」の活動をお伝えします。

神田 美子（かんだ よしこ）／京都大学医学部附属病院小児科ボランティアグループ「にこにこトマト」代表。1992年長女の入院がきっかけで、おはなし会やコンサートなど個人的な活動をはじめ、1995年「にこにこトマト」を発足。共著に『きょうは何しよ、何して遊ぼ？』。著書に『egao』（にこトマ通信100号記念誌）

子どもの心は日々成長している

1992年に長女が入院した時に、チェロのコンサートを開きました。私の心の隙間に響き、病院にも芸術が必要だと感じました。そして子どもは病気であっても、よい成長ができるための刺激の時間が必要だと思いました。長女の退院後も活動を続け、1995年に友人、知人に声をかけ、グループとして発足しました。患者の親がはじめたことで、病院側も受け入れやすかったと思いますし、偶然にも阪神淡路大震災の直後だったので、ボランティアという言葉も社会になじんでいるときでした。

無関心な人にも伝えたい

組織運営は会員制にせずに、カンパ制をとりました。

最初に内部の人にむけて書いていたニュースレターは、いろんな人に伝えたいという思いから、外部にむけて発信するように心がけました。多くの人に活動を知ってもらい、支援していただくことこそ、意味があると考えたからです。今は面識のない方からも支援をいただくこともあります。またカンパはお金だけでなく、バザー商品であったり、人を紹介してもらうことであったり、情報提供などでもカンパとよび、その人にあったカンパをいただいて支えられています。

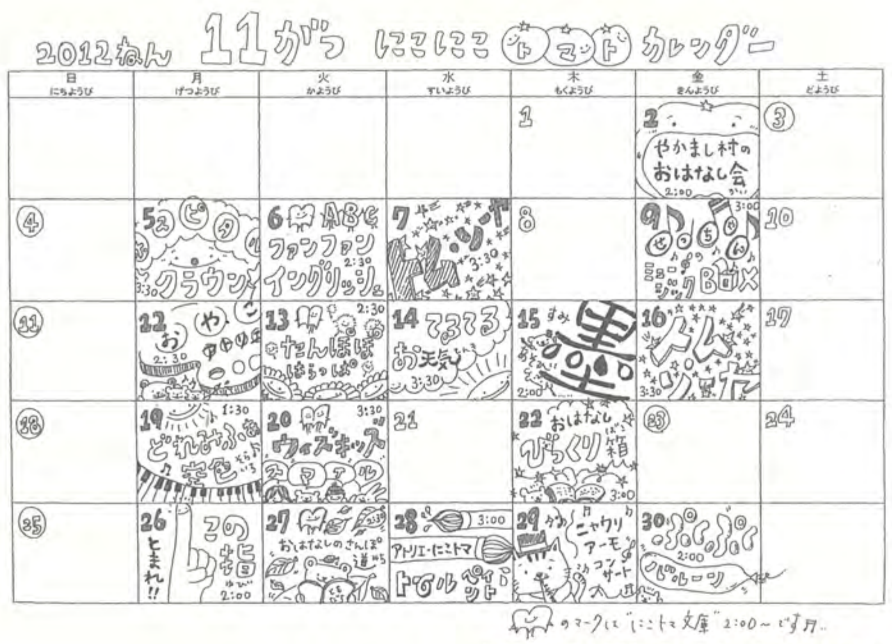
子どもがうれしいかな、と思うことをする

活動は、「子どもがうれしいかな？」と思うところを基準にしています。一度取りくんで面白かったらまた行うという方法で続けてきました。私の役目は、子どもたちの親に特別なことでなくてもできることがあると、気づいてもらうことです。親から相談や嘆きを聞くこともあります。病気の子どもも大変だけれど、付き添いをしている親や、家でまっている兄弟もがんばっている。夏祭りや、バザー、ハロウィンなどの行事では、親も一緒に楽しんでもらえると、相乗効果で元気になれます。

活動は多くのにこトマメンバーに支えられています。

チャンスは、社会と同じだけ

今は、土日やお盆、お正月休みをのぞいてほぼ毎日、プログラムでスケジュールが埋まっています。子どもたちが、プログラムを選べることが大事。制約のある入院生活のなかで、参加したいものとしたくないものとを自分で選べるようにしています。今後はさらに、プログラムを増やし、一日に複数のプログラムがあって、もっと子どもたちの選択肢が広がっていくようにと、夢がふくらみます。また、大きな子どもやお母さんだけの時間や活動もつくっていきたいです。



毎月のプログラムの予定は楽しいカレンダーで伝えられます。

夏祭りに参加して

2012年7月14日、夏祭りに参加させてもらいました。午前中は、病室から出られない子どもの部屋を回る「出張夏祭り」。こんにちはと部屋に入ると、待ってましたという表情で迎えてくれます。ちゃんと浴衣に着替えて待っている子も。出張夏祭りは、金魚すくい、スーパーボール、当て物、ヨーヨーつり、たけたけキャッチャーなど盛りだくさんです。おもちゃの金魚は、水をはった容器に入れて、ポイが破れるまですくいます。勢いよく、あっという間にやぶれちゃう子も、慎重に確実に時間をかけてすくう子もいろいろ。各室、時間にして10分程の夏祭りでしたが、充実したメニューを味わってもらいました。

午後からは、お面、ダーツの景品、みんなが作ったウチワなど、にぎやかに飾られたプレイルームでのお祭りです。小さなプレイルームは人でいっぱいになりました。特に得点制のダーツは白熱。景品をたくさん抱えて、マヨネーズで名前を書いてもらった「たこせん」もって、大忙し。点滴のついているカートを押している子、車いすに乗っている子、マスクや包帯をしている子どもたちでしたが、お祭りに真剣！夢中！で、ころころかわる表情と満足げな笑顔が、印象的でした。

カラフルな色や柄のリボンのロールがずらりと棚にある事務所。夏祭りやバザーの商品などを、ラッピングするためのものです。ラッピングは、にこトマのこだわりで、にこトマの活動を象徴するものでした。神田さんの話や活動に参加させてもらって、みんなの大切な時間を、スペシャルにするための工夫や気遣いを感じました。

レポート：阿部 こずえ

いのちといのりのものがたり
――アートのある病院

森 合音 NPO法人アーツプロジェクト

香川県善通寺にある香川小児病院には、日本で初めての“ホスピタルアートディレクター”がいる。写真家、NPO法人アーツプロジェクトの森合音さんだ。森さんは2013年度に香川小児病院と善通寺病院が統合し新設する、四国こどもとおとなの医療センターの病棟内外をアートでいろどる一大プロジェクトに携わっている。そして、病院でのアートディレクションをするにいたるまでには、森さんをとりまくさまざまな“縁”があった。

撮影：南 伸一郎

森 合音（もり・あいね）／徳島生まれ。大阪芸術大学写真学科卒業。2000年クリエイティブオフィスフロムハーツ設立、フローリストとして活躍。2003年に夫を亡くした後、夫の遺したカメラで二人の娘の日常を撮った「太陽とかべとかげ」で2005年富士フォトサロン新人賞を受賞。同年「Edge-境界-」でエプソンカラーイメージングアワード・エプソン賞受賞。2007年10月徳島文学書道館にて個展。現在、徳島県在住。著書「太陽とかべとかげ」清流出版

病院とアートが出会う

森さんが香川小児病院にアートを届けるきっかけになったのは、新聞の連載を依頼されたことだった。当時、NPO法人アーツプロジェクトに所属したばかりだった森さんは病院で見たこと感じたことをテーマに写真と文章で表現する作品を制作することにした。ちょうどそのころ、身内が香川小児病院に入院し「小児病院」という場所が気になり始めた。さっそく院長に連絡をとり、作品の意図を伝え、待合室でしばらく座っていてもいいかと尋ねたところ、快諾。ある日、待合室で過ごし終えて去ろうとしたとき、院長から「まあお茶でも」と声がかかり、森さんがこれまでの活動についてなどを話しているうちに、この病院でもアートプロジェクトをしてほしいという話になった。それはまるで、森さんが来るのを待っていたかのようなタイミングだった。

そこから、アーツプロジェクトの代表の森口ゆたかさんの助言を得つつ、メンバーであり画家の増田妃早子さんと何度も打ち合わせを繰り返した。どんな壁画をどのように描くのか、じっくり丁寧に決めていった。

ひとつの病棟の壁画を描くところからはじまり、その壁画を見た人たちから「次はうちの病棟も！」と次々に依頼され、いつしか病院内がアート空間に生まれ変わっていった。その後もギャラリーや庭も作りたいなど、アートのある環境づくりの要望は絶えなかった。アートの力で少しずつ病院の風景が変わり、そこで過ごす人たちのアートに対する気持ちにもだんだんと変化が起こってきていた。

アートディレクターとして森さんが病院の職員となった背景には、香川小児病院と善通寺病院の統合の話があった。香川小児病院の中川義信院長には、新病院をより快適に過ごせる空間にしたいという強い意志があり、そのために出来ることを常にリサーチしていたのだという。そして、新病院の病棟の中も外もアートでいっぱいにしようとプロジェクトが動き出した。解放されていて、風通しがよく、空気も人も自然な流れのなかで過ごせる病院に、和やかな雰囲気のある病院にしたいという想いが作品というかたちとなり、アートを介して実現されようとしている。

アートのなかの見えないエネルギー

取り組みはじめた頃は無力感でいっぱいだったという。急患で運ばれる人を横に見ていて「アートってなんて無力なんだろう…」と何度も強く思ったが、アートだからできること、アートにしかできないことがあるはず、と思いをめぐらせた。そして、決して能動的ではないけれど“待つ”ことならできると気がつく。アートは直接傷を治したり、医療的な治療は施せないけれど、患者さんの回復を祈り、待つことはできる。目に見えない祈りや想いを、さまざまなかたちにして届けること、それはアートだからできることだと、森さんは気づいたのだ。

＊＊＊ フロアをつなぐメッセージ ＊＊＊　撮影：森 合音

病棟の壁には、たくさんのものがたりがある。木々のなか（下のフロア）で過ごしていた鳥たちが、上のフロアに行くにつれて元気に空高くを飛ぶ姿が描かれている。

＊＊＊ ひとやすみのイスとお花 ＊＊＊　撮影：森 合音

病院のところどころに小さなイスがちょこんとある。扉を開けると詩集があったり、生花が飾られていたりする。イスのほかにも、病棟内にある生花は、毎週森さんが交換していて、病院で過ごす人の気分転換にもなっている。

祈りをのせて――『風の伝言プロジェクト』

新設される四国こどもとおとなの医療センターで取り組まれるアートプロジェクトのひとつに『風の伝言プロジェクト』がある。それぞれの想い、祈りを風にのせて届けようというテーマのもと、全国のアーティストや学生から寄せられた300点の作品を病棟内、個室にも展示しようというプロジェクトだ。「有名な作家の作品を少数だけ収集するのではなく、多くの若いアーティストに発表のチャンスを」と願う、香川小児病院中川院長の意向を反映させたこのプロジェクトは、アートミーツケア学会2010年度仙台大会で森さんと知り合った学会役員の日野陽子さんの協力（美術教育の視点から、大学やアーティストを紹介してもらった）により実現した。

『風の伝言プロジェクト』に寄せられた作品は選定されることなく、すべて展示される予定である。作品の多様性を大切にしたいという考えから、選定しないように決めた。選ぶ人間の感覚で「これは癒される、これは良い作品」とは言えない。作品を見た人自身が感じたことを尊重できるように、そしてアートの可能性がより広くなってほしいという期待が込められている。

集まった300点の作品を一点一点額装するのも森さんの仕事。膨大な作品群と作業量を前にしながらも「どんな人がどの作品を選ぶのか、今からとても楽しみ」と期待にあふれていた。

「ひとつのプロジェクトを終えたらおしまい、というのではなかなかアートの価値はわかってもらえない。その場に自分の身をおいて、雰囲気を感じたり人の話とニーズに耳をかたむけることが大切。そして、そのニーズをアート界に持って帰って、ニーズに沿ったアートを展開したい」と森さんは話す。やり方にマニュアルはないし、マニュアルがあってできることでもない。ホスピタルアートディレクターの役割には、まだ見えない部分が多いけれど、見えないものを見ようとすること、ないものをつくろうという気持ちこそが大きな力の源となるのだろう。

レポート：大久保 明子

INFORMATION

2012年度愛媛大会では、新設中の四国こどもとおとなの医療センター見学ツアーを予定していますので、ぜひご参加ください。（移動中は香川～愛媛間の風景も楽しめます）また、会場では新設病院におけるアートプロジェクトの様子と、『風の伝言プロジェクト』の作品の一部を展示します。

臨床こばなし その1

体感をことばにする

臨床こばなしでは、通常の事例報告や現場レポートからはこぼれおちてしまうようなこと、しかし生きることやケアにとって本質的なことがらを含むような、小さな出来事や経験について、あれこれ語り合います。登場するふたりは大学院で同じ音楽療法の研究室に所属し、さまざまな障がいのある人たちと即興音楽セッションをおこなってきた三宅博子（神戸大学研究員）と中島香織（たんぽぽの家スタッフ）です。

Nくんとわたしたちの背景

5年前のNくんと三宅

当時11歳のNくんと三宅が即興音楽セッションを始めたのが2006年。ALD（副腎白質ジストロフィー）[*1]という神経難病の発症から約1年後のことでした。その後症状の進行にともない、2009年から彼の自宅でセッションを行っています。中島は、セッションが自宅に移行してから加わったので、彼が話したり走りまわったりしていた頃のことを知りません。現在、医学的には外界からの刺激にたいして反応がないとされているNくんですが、瞬きのような微細な身振り、肌の質感、からだの緊張状態などを、わたしたちは彼の表現とみなして（もちろんすべてではないけれど）、ともに音楽をしています。

Nくんとの音楽は自己満足？

中島　今回こういう風に話す機会をつくったのは、Nくんとのセッションのことを誰かに話すと、「それはNくんにとって意味があるの？」「自己満足じゃないの？」とかっていう質問がいつもある。でも彼と実際に接していると体感的な手ごたえは確実にあるんですよね。この場を借りてそれをどうにかことばにしたい、というむこう見ずな企画ですが、必要な作業かなと。

三宅　わたしたちの専門領域が一応音楽療法で、そのレンズで見られるとどうしても「効果」という要素がついてまわる。だからそういう質問がでるんだよね。でも、いま中島さんが言った「体感的に」の部分を大事にしたいと思う。一緒に音楽をしていると、Nくんの「目が語っている」とか「鼻の穴が語っている」とかっていう状況はたくさんあるのだけど、場を共にしていない人に説明するのがほんとうに難しくて。一緒に音楽をしているというのはあなたの思い込みじゃないの？と言われても、説明できないんです。Nくん本人に確かめるわけにもいかないし。

3年前のセッションの様子

中島　そこで一時的にたどり着いたキーワードが「わからなさ」ということでしたよね。三宅さんは論文で「了解不可能性」[*2]と言っていましたけど。

「わかる」を前提としないコミュニケーション

三宅　ごく一般的な音楽療法だと、音楽にたいするクライアントの反応の意味が「わからない」と言うのは、自分のした音楽が妥当でないと言っているようなものだよね。というような前提が透けて見える。だけど実際には、病そのものが進行していくなかで、Nくんにとって、療法もしくはケアとして効果や意味があるのかなんて確かめようがない。わたしたちが楽しいだけ？みたいなね（笑）

中島　ほんと、単純にすごく楽しいんですよね。もちろん、撃沈することもありますけど。でもどちらにしても、その感覚ってひとりでなにかをやっている時には起きようがないもので、誰かと共に何かをしている、コラボレーションをしている時にこそ起きるものですよね。

三宅　傍から見たら一方的に音を鳴らしているようにしか見えないかもしれないけど、わたしたちとしてはNくんとのコミュニケーションは成り立っているんだよね、まさに体感的に。

Nくんとわたしたちは、言ってみれば異なる生の様式で生きている。だから、自然とコミュニケーションのとり方も通常の言語ベースのコミュニケーションと違ってくるんじゃないですか。

中島　また別の感覚としてはNくんの家にバンドの練習をしに行っているような感じもあります。でもお金をいただいているということひとつとってみても、バンドとは違うし、ほとんど「音楽」をしていないときもある。何十分もお母さんと話していたり、紙芝居つくったり踊ったり。何か「事を起こす」ことが大事と思っているのかな‥。だから、一応音楽療法の看板をぶらさげて行っているわけだけれど、もう音楽である必要があるのかどうかも怪しくなってくる。ちょっと乱暴だけれど、彼を取り巻く人や状況を含めて大きくアートと言ってもいいんでしょうかね。

三宅　そうすると「アート」って何？っていう話になったりもするけども（笑）。

中島　確かに…。ひとつ近い見方として 'Art of living' [*3]というものがありますよね。あれはどういうものなんですか。

三宅　平たく言ってしまえば、その人の生きる様式そのものが表現でありうるというような見方です。植物状態の患者さんの音楽療法にかんする文献に出てきた言葉ですね。Nくんとのセッションに共通するところがあるなあと思ったのだけど、当時自分が本当に実感できていたかどうかは自信がない。そういう風に思うようにした、というのかな。それで自分の実践も変わってくると思ったんです。Nくんをとおして 'Art of living' を体感できるようになったのは、ほんとうについ最近なんです。

中島　そうか、この前Nくんとのセッションの後、二人で美味しいかき氷を食べて興奮を冷ましながら話をしましたよね。その中に大事なトピックがあったように思います。「わからなさ」から抜け出すような、かと言って開き直りともちがうような。まあそれは次回にまわしましょうか。

というわけで今回はこのへんでお終いです。かき氷を食べながら何を話したのか、わたしたちはどうしてそれほど興奮していたのか。見切り発車のこの連載、どうぞ気長に見守ってください。（中島）

＊1 ALD（副腎白質ジストロフィー）／中枢神経系において脱髄や神経細胞の変性、副腎の機能不全等を伴う遺伝性疾患。症状は進行性で、コミュニケーションが取れなくなり、通常1～2年で臥床状態となるとされる。
難病情報センター http://nanbyou.or.jp/sikkan/109_2.htm

＊2 了解不可能性／三宅博子 (2009)「音楽的出来事としての音楽療法プロセス：Nくんの事例を通じて」、日本音楽療法学会誌第9巻1号：16 - 25.

＊3 Art of living／Herkenrath A. (2005) Encounter with the Conscious Being of People in Persistent Vegetative State, in Music Therapy and Neurological Rehabilitation: Performing Health, David Aldridge (Ed.), Jessica Kingsley Publishers : 139-160.

三宅 博子（みやけ・ひろこ）／神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究員。障がいを持つ人たちとの即興音楽療法の実践・研究やコミュニティの音楽活動に携わる。日々の生活や生きることと密接に結びついた「ふだん着の音楽」に興味を持っている。

中島 香織（なかじま・かおり）／学生時代に変な音楽や変な人たちに出会い、人生が楽しくくるい始めました。音楽すること、考えること、生きること、すべて身体をとおして実感していきたいと思っています。いまはたんぽぽの家にいます。

レポート　第1回 ホスピタルアート研究会

森口 ゆたか　NPO法人アーツプロジェクト代表

この度、NPO法人アーツプロジェクト主催で、ホスピタルアートの研究会を9月9日に開催しました。まず始めに立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授の中村陽一先生から社会デザインとは何か？というお話をいただきました。震災や経済格差、超高齢化社会とさまざまな社会不安が取り巻くなか、今後ますますその研究が期待される分野だと思います。

次に、この中村教授の下で学んでおられる樺島沙織さんから、現在ご自身が所属しておられるACT（包括型生活支援プログラム）についてご紹介いただきました。現在、当法人も兵庫県立光風病院という大規模な精神病院の改築にあたりアートコンサルティング業務を遂行中です。日本がようやく精神病院の内装やアートにも気を使うようになった現在、すでにイタリアでは精神病院は全廃され、地域の人々が患者をサポートするシステムが整っていることを知り、日本の精神医療のありようを考えさせられました。中村先生からも樺島さんからも、もっともっと多くのお話を聞きたかったと参加した多くの方々から感想が寄せられました。

岡崎 伸先生より発表

次に発表してくださったのは、大阪市立総合医療センターの医師で「子どものホスピスプロジェクト」の中心メンバーである岡崎伸先生です。在宅で療養中の子どもたちやその兄妹、家族に楽しい時間を届けようと活動しておられます。当法人も今年からこの団体にアーティストを派遣することによってサポートしていこうと写真家の北川孝次さんにお願いして、子どもたちや家族の輝ける笑顔の一瞬を写真作品として提供しています。この研究会は大変好評でしたので、今後も定期的に開催予定です。ご興味をお持ちの方はぜひ当法人のHPにアクセスしてみてください。

▶ NPO法人アーツプロジェクト http://www.arts-project.com

レポート　「個人」の視点がひらく、新しい出逢いの道筋
—NPO法人クリエイティブサポートレッツの挑戦

長津 結一郎　東京芸術大学大学院

展覧会シリーズ「存在と生活のアート」vol.1『佐藤は見た !!!!!! ～誰が何をどう見ているか、どうしてあなたは言い切れるのかしら？』（2012年9月20日～30日、A/A gallery［東京］）は、NPO法人クリエイティブサポートレッツが運営する静岡・浜松の障害者福祉施設「アルス・ノヴァ」の日常を、写真や文章などで伝える。年配の職員と少年の間にある何とも言えない空気（写真と文章の展示）、言葉が通じづらい少年と職員との間にだけ成立する独自の「手話」（メモの展示）、普段の作業に愚痴を言ってばかりの人が熱中する「エロスクラップ」が発展し、施設内に作られた専用個室「浜松秘宝館」（施設からそのまま移設！）……。

本展が特徴的なのは、「障害者」「施設職員」というカテゴリではなく「個人」の視点でエピソードを語ることの意義を巧みに提示していることだ。「ここにあるものは作品ではない。障害のある人と接点を持つ人が、彼らとの日常生活の中で面白がっている出来事に触れてもらう機会を作りたかった」と語るのはディレクターの鈴木一朗太さんだ（「障害とアート研究会」（東京）第2回）。

本当に障害のある人の「ありのまま」を見せるには「その場に居合わせる」しかないし、介在する他者が表現することで既にそこにあるのは「彼ら」の「ありのまま」ではない。それでも鑑賞者が居合わせることなくその雰囲気を追体験できたとすれば、場について語る人々の視点や、関わりを伝える手法が、単一的でなかったからだろう。様々な視点や価値観、生き方を肯定しながら関係性を紡ぎ、それを多様な手法で外部に伝えてゆく。そのことで鑑賞者は想像力をかきたてられ、展示物の向こうにある未だ見ぬ存在、未だ触れえぬ関わりに「出逢いたくなる」。それが「存在と生活のアート」が示唆する価値なのかもしれない。

▶シリーズ「存在と生活のアート」http://www.ableart.org

アートミーツケア学会　入会のご案内

会員を募集しています

人間の生命、ケアにおけるアートの役割を研究する場として、またアートの力を社会にいかしていくためのネットワークとして、2006年に設立しました。アートミーツケア学会では、趣旨に賛同する会員による活動基盤をつくりたいと考えています。多くのみなさまに賛同、支援をいただき、学会を支えていただけることを願います。ぜひ、入会し、研究や活動にご参加ください。

事業案内

1. 大会の開催
講演、研究発表、実践報告を実施し、学会員による発表、討論の場を設けるとともに、会員相互の情報交換、交流の場として年1回大会を開催します。

2. 調査研究の推進
「医療とアート」「高齢者とアート」「障害と創造性」「アート・テクノロジー・ケア」など、アートとケアに関する調査研究を推進します。

3. 学会誌の発行
アートとケアに関する研究論文や調査報告、実践紹介、エッセイ、評論などを掲載した学会誌を発行します。

4. ニュースレターの発行
日本や海外における新しい情報を掲載したニュースレターを発行します。

5. フォーラム、シンポジウムの開催
特定のテーマ、タイムリーな課題についてのフォーラムやシンポジウムを開催します。

6. プログラムの開発、プロジェクトの実施
ケアの現場へのアーティストの派遣、アート作品の導入、プログラムの開発などを推進します。

7. 国際交流の推進
アートとケアに携わる団体と共同研究を実施します。また、情報交換、交流事業を実施し、アートとケアに関わる国際的なネットワークの形成をめざします。

申し込み方法

1. 郵便振替にて年会費をご入金ください。
入金先　アートミーツケア学会
口座番号　00920-4-252135

2. ご住所、電話番号、お名前、会員を記入のうえ、年会費の払込票（コピー可）をそえて事務局までお送りください。

3. 事務局より入会手続き完了のお知らせを返送いたします。

会員種類・年会費

□個人会員　一般10,000円　学生5,000円
□賛助会員　30,000円

役　員（敬称略）

□会長　鷲田清一（大谷大学教授）
□副会長　中川　真（大阪市立大学大学院文学研究科教授）
副会長　森口ゆたか（美術家、NPO法人アーツプロジェクト代表）
□常務理事　播磨靖夫（財団法人たんぽぽの家理事長）
□理事　秋田光彦（浄土宗大蓮寺・應典院住職）
理事　坂倉杏介（慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所特任講師）
理事　志賀玲子（舞台芸術プロデューサー、ALS-Dプロジェクト）
理事　杉林英彦（愛媛大学教育学部講師）
理事　鈴木理恵子（女子美術大学准教授）
理事　関口怜子（ハート＆アート空間ビーアイ代表）
理事　ダーリング・ブルース（美術史家）
理事　高橋伸行（アーティスト／やさしい美術プロジェクトディレクター）
理事　銅金裕司（メディアアーティスト、京都造形芸術大学教授）
理事　並河恵美子（NPO法人芸術資源開発機構代表）
・理事　野津　亮（大阪府立大学助教）
理事　畑　祥雄（関西学院大学教授）
理事　日野陽子（京都教育大学准教授）
理事　本間直樹（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター／文学研究科准教授）
理事　的場政樹（医療法人直志会袋田病院院長）
理事　水野哲雄（京都造形芸術大学子ども芸術学科教授）
理事　見寺貞子（神戸芸術工科大学教授）
理事　三輪敬之（早稲田大学創造理工学部教授）
理事　山口悦子（大阪市立大学医学部附属病院安全管理対策室専任医師）
理事　横川善正（金沢美術工芸大学教授）
□監事　太田好泰（エイブル・アート・ジャパン事務局長）
監事　柊　伸江（みっくすさいだー代表、京都聖母女学院短期大学非常勤講師）

アートミーツケア学会2012年総会・大会

■日程：2012年12月15日（土）～16日（日）
■会場：愛媛大学（愛媛県松山市）

＊14日（金）には、香川県にてホスピタルアートの現場をめぐるスタディツアーを行います。

大会プログラムの詳細は学会ＨＰにてご案内します。
プレゼンテーション（研究発表、実践報告）、ポスターセッションの募集を行いますので、ふるってご応募ください。

＊お申し込み・お問い合わせは、事務局までお願いします。

編集後記

●入院している人も在宅でケアを受けている人も、その人なりの技法で世界と繋がっているのだと思います。今回からはじまった「臨床こばなし」、ちいさな感覚に耳を澄ますような丁寧な場にしていきたいです。さて12月、愛媛で色々な方とお話しできるのが今から楽しみです。（中島香織）

●わくわくする病院。今回取材で赴いた香川小児病院や、新設病院の計画には訪れた人をやさしくむかえてくれるさまざまな仕掛けがあり、病院のイメージを一新させるようでした。そしてそのわくわくが、身体と心の健康にいちばん効くのかな、と思いました。（大久保明子）

●9月にワシントンＤＣのジョージタウン大学大学病院の小児科を訪問しました。アーティストや音楽家が画材や楽器をもって病室を訪ねる様子は、にこにこトマトさんの出張夏祭りと重なりました。入院中の子どもや家族に楽しい時間を届けられることは、医療者やボランティアにとってもとてもうれしい時間でした。（森下静香）

アートミーツケア学会
ニュースレター
Vol.10　2012年11月1日発行
発行　アートミーツケア学会
http://popo.or.jp/artmeetscare/
〒630-8044 奈良市六条西3-25-4
財団法人たんぽぽの家内
Tel.0742-43-7055　Fax.0742-49-5501
E-mail.art-care@popo.or.jp